

親から性暴力「抵抗できるわけない」

続く無罪判決 当事者らにショック

「家族を壊したくない思い 足かせに」

父親から娘への性暴力をめぐる裁判で、無罪判決が続いている。「抵抗が著しく困難だったとは言えない」などの理由だ。被害経験がある女性らは、「親子の力関係は対等じゃない。怖くて抵抗なんかできるわけない」。実態と、司法の判断のギャップに打ちひしがれている。

大阪府内の女性(19)は、「抵抗できる」ことを前提にした判決にショックを受けた。「そんな無理。分かってほしい」

小学2年の時だった。休日、昼寝中に義父から性暴力を受けた。「静かにしろ」。怖くて指示に従うしかなかった。「トイレに行きたいと、その場を離れるのが精いっぱい」の勇気だった。

トイレから出て、居間にいた母に泣きながら打ち明けた。味方になってももらえず、「3人の秘密だ」と口止めされた。

その後、妹や姉も義父に「(体を)触られた」と口にしたことはあったが、詳しく聞けなかった。姉が義父に反抗するとハンガーで殴られ、真冬に家から閉め出されるのを見た。自分は率先して食器を洗うなど、親を怒らせないように常に機嫌をうかがった。義父にされたことを話せば、家族がバラバラになると思って沈黙を守った。

高校生になり、中学時代の担任と話す機会があった。妹が、義父に殴られるなど虐待を受けていることを相談する中で、自らの被害

も明かした。児童相談所に通報され、保護施設に入った。学校や家庭での日常を失い、生きる意味が分からなくなつて薬を大量に飲んで入院し、単位が足りなくなつて高校を中退した。現在は家族と離れて暮らす。

関西地方の女性は、娘が10代前半で被害に遭っていたことを後から知った。「家族を壊したくない」という思いが足かせになり、抵抗できないことを裁判官は学ぶべきだ」と訴える。

加害者は、再婚相手だった。仕事や入院で女性が家を空けた時、繰り返し性暴力を振るっていた。娘は誰にも打ち明けられないまま

視野狭窄や不整脈の症状が出て、不登校になった。カウンセリングを受けていた精神科でも被害のことは黙っていた。

高校進学後、教員が異変を察し、女性に連絡した。黙っていた理由を、娘はこう説明したという。「家族に助けて欲しかったが、事実を話せば父と慕っていた人を犯罪者にしてしまう。きょうだいの心を傷つけることにもなり、抵抗があった」

女性は言う。「見ず知らずの人による暴行とは全く違い、加害者は家族だからこそ、家族の誰にも分からないように巧妙に振る舞える」。無罪判決が出たことで、いま被害に遭っている人が助けを求めることを諦め、生きる気力をなくすのでは、と心を痛めている。娘は精神障害を患って働くことができず、医療機関で治療を受けている。

「精神的に強烈に支配 認識を」専門家

話しかけても反応がなかったり、急に体が動かなくなったり。「多くの被害者は精神的な課題を抱えている」。虐待やDVの経験者を支援する一般社団法人「WAN A関西」の代表、藤木美奈子さん(59)はそう話す。

大半は性暴力を受けたことを相談できないまま育っている。被害を周囲に訴えた場合も「警察で根掘り葉掘り聞かれてしんどくなるだけ」「密室のことで証拠がない」などと言われる経験をしている。

藤木さんは障害福祉サービス事業所「マルヒア」(大阪市)を運営し、職業訓練や自尊感情を回復するプログラムを提供している。親から性暴力を受けた10代後半、20代の女性を通じており、多くは児童相談所からの紹介だ。

藤木さん自身、11歳の時に義父から繰り返し性暴力を受けた。抵抗

抗しようにも寝返りを打つのが限界だった。それでも家庭の他に生きていける場所がなかった。勉強しないと食事を出してもらえない、進学先を一方的に決められる、など子どもは親に命を預けているのと同じ、と藤木さん。「従わざるを得ないと思っっている事実を社会が受けとめようとして、被害者に救済の場を提供することが必要だ」と話す。

今年3月、静岡地裁で、12歳だった長女への強姦罪に問われた男に無罪が言い渡された。家族が気づかなかったことが「あまりに不自然」などとされた。名古屋地裁岡崎支部では、19歳だった娘への準強制性交罪に問われた男に無罪判決が出た。男は娘が中学生の時に性的虐待を始め、暴力を振るうこともあったと認定された一方、「強い支配従属関係」は認められ

ず「(娘は)一定程度自己の意思に基づき」日常生活を送っており、抵抗が「著しく困難」とまでは言えないとされた。

児童虐待に詳しい野田正人・立命館大教授(司法福祉論)は「性的虐待があった時点で、抵抗できなかったどうかに焦点をあてるのは議論がずれている。抵抗のすべを知らなければ、抵抗などできない」と指摘する。

救いを求める、抵抗するという手段を学習する前の子どもが、家庭で暴力に巻き込まれる。「加害者から精神的に強烈に支配され、『抵抗』という選択肢を奪われていく点はDVや虐待に共通する」。それを、子どもに関わるすべての人が認識する必要があるという。

近年の研究で、虐待は脳を変形させるほど子どもに悪影響を与えていることがわかっていく。野田教授は「1回でも性的虐待があれば、介入して親子を離すことを検討しなければならぬ」と話す。

(中塚久美子)



親から性暴力を受けたことがある女性と話す藤木美奈子さん＝大阪市

2019年5月8日(水)
朝日新聞